



## なりたい自分をメッセ

先日、ステキな場面に出会いました。こんな場面です。

ある集会の帰り、けい君（仮名）は体育館の靴箱から自分の靴を出そうと、すたすたと歩いています（と、私が勝手に思っていたのですが…）。次の瞬間、おもむろにお家の方の靴を自分のより先に取り出し、さっと足元に置いてくれたのです。実は、このお母さん、お子さんのご出産を間近に控えた妊婦さんだったのです。

なんと。

そのさりげなさにも、非常に感心させられた次第だったのですが、これは簡単なことではありません。私なんかは、つい相手のために何かをすることを“褒めてもらう“ためにやっちゃうことが往々にしてあります。いいことやっているから、誰か見てて～、褒めて～って。もちろん、そのことを完全否定しません。相手の気持ちを思いやる第一歩ですから。ただ、芯から相手の気持ちをも思いやるのは、大変難しい。むしろ、近しい人になればなるほど、難しいと思っているのは、私だけではないでしょう。家族だから解ってくれるのではなく、相手の置かれた状況や言葉の端々をもとに、自分の経験をフル検索し、恐る恐る行う。時には、違っていたと微調整を繰り返しながら、より相手に向き合う活動こそが、思いやるということですね。こんな難しいことを、爽やかに軽々と行っているけい君には、やっぱり改めて感動するわけです。

このような相手の気持ちを思いやることを、エンパシーと言われることがあります。つい、共感する力だと言ってしまうようですが、微妙にニュアンスが違うそうです。共感とは、シンパシーと言われ、相手と同一化してしまうこと。つまり、共感ではない他者理解こそが、エンパシーであり、これからのコミュニケーションには欠かせない資質・能力だと言われています。（参考；ブレイディみかこ「他者の靴を履く」文藝春秋. 2021）

ブレイディみかこ氏は、エンパシーを「誰かの靴を履く」と例えて解説しています。

なるほど、納得。

他者の靴を履くと、同じサイズであってもモゾモゾする感じがして、なんだか落ち着かない。それくらい、相手を思いやることは、微妙で難しいのです。期せずして自分より先に身重のお母さんの靴をそっと出すという活動は、まさにけい君のエンパシーの現れ。

楡木小学校は、なりたい自分になる学校です。なりたい自分になるためには、友達との協働的な学びが欠かせません。つまり、エンパシーは不可欠な力だと思うわけです。これは、学校だけではなく、これからの社会においても、また不可欠な力でしょう。なりたい自分になるためには、お互い持ちつ持たれつしながらやって行かねばなりません。一人だけでなりたい自分になれるわけではないのですから。

楡木小学校には、けい君みたいなこんな素敵なお子さんがいるのです。